

'98 -1・2

北海道民族学会通信

北海道民族学会

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

北海道開拓記念館 出利葉浩司 気付

Tel(011)898-0456 Fax(011)898-2657 e-mail QWB01760@nifty.ne.jp

題 字：椿坂小龍(點の会所属)

編 集：出利葉浩司

発行者：谷本一之

印刷所：株式会社北海道機関紙印刷所

1998(平成10)年度北海道民族学会第1回研究大会発表要旨——○

(1998年 6月13日 於；北海道開拓記念館講堂)

東北帝国大学農科大学博物館におけるアイヌ民族資料の展示について(1)

沖野 慎二*

表題の博物館は現在の北海道大学農学部附属植物園内にある博物館を指し、明治40年に札幌農学校が帝国大学になり大正7年に北海道帝国大学と改称されるまでの間の名称である。

明治10年開設の開拓使札幌仮博物場を母体として明治15年に開設された札幌博物場が現在の建物だが、100年以上の歴史を持つ当館の唯一の目録が農科大学時代の明治43年に刊行された展示品目録「札幌博物館案内」である。B6サイズ、本文わずか68ページの小冊子にもかかわらず、当時の展示室の見取り図や動物、岩石・鉱物、考古学など様々な分野の展示品目の詳細、とりわけアイヌ文化に関する豊富な知見を今日に伝えてくれる数少ない貴重な文献の一つである。

本報告は、アイヌ民族資料が明治時代末期(今世紀初頭)に博物館の展示対象として、あるいは学問の対象としてどのように扱われていたかを知るための基礎資料として目録の概要を提示し、目録が編集・刊行された学問的・歴史的背景を明らかにすることを目的としている。

現在、植物園管理棟2階の北方民族資料室に展示されているアイヌ民族資料は当時、「人類学標

本類」の中の「アイヌ土俗品」という名称で、1. 家屋其他建物、2. 衣服及附属品、3. 日用器具及樂器、4. 漁獵具及武具、5. 工芸具及工芸品、6. 宗教的用品の6項目に細分類され、博物館2階の一角に展示された。全展示資料2,247点のうちアイヌ民族資料が283点という決して無視できない数字であることや、「熊祭式場」(ヌササン)が独立した別の展示ケースにおさめられていたこと、大部分の資料についてアイヌ語名称や産地等が詳細に記載されていることなどは大変注目される。

博物館のアイヌ民族資料収集活動が最も盛んだったのは開拓使が管理した明治10年頃から札幌農学校移管前後の明治17年頃までで、その後停滞、再び盛んになるのは昭和初期、すなわち犬飼哲夫と名取武光が博物館を運営し本格的なアイヌ文化の研究を始めた時代である。従って、目録はアイヌ民族資料収集が停滞した時代に出版されたが、この時、博物館館長をしていたのが動物学者として著名な八田三郎である。八田は明治37年に農学校に着任し、明治40年から退官する昭和4年まで館長を務めていたが、着任後しばらくは目録の編者である村田庄次郎(博物館助手)とともに動物

*おきの・しんじ

北海道大学農学部博物館 文部技官(〒060-0003 札幌市中央区北3条西8丁目/Tel.011-251-8010)

標本（特に鳥類）採集を精力的に行い、同時に開館以来蓄積された多くの資料を体系的に整理・展示を行った。そのような状況の中でおそらく八田の指揮のもと目録が編集・刊行されたものとおもわれる。

では、大正時代に入り八田がアイヌ研究を始める（映画「白老アイヌの生活」の撮影など）まで博物館にアイヌ文化を研究するスタッフが全くなかったにもかかわらず、目録に記載された豊富な知見はいったいどこから（誰から）もたらされたのだろうか？目録の「発行の趣旨」には「各科専門の士に依頼し本書を編集し…」とあることから、博物館と交流のある研究者に依頼したものと

おもわれるが、アイヌ民族資料に関しては一体誰だろうか？ 筆者は当時このような豊富な知見を供給できる立場にいた人物として最も可能性が高いのはジョン・バチェラーであると推測する。これまで初代植物園園長の宮部金吾との関係は大きく注目されてきたが、同じ敷地内にある博物館との交流を示すような資料はバチェラーが寄贈した熊檻模型（ヘベレセツ）1点とウミガラス卵標本4点以外には見あたらない。

はたしてバチェラーと博物館は深い関係にあったのだろうか？そしてこの目録のために情報を提供したのだろうか？次回の報告でその可能性を検証したい。

現代におけるアイヌの音楽活動に関する一考察—標茶町塘路の事例から(1)—

荻原小百合*

0. はじめに

本報告^(注)は主に、北海道釧路管内 標茶町 塘路^{しべちやうとうろ}のアイヌ文化伝承活動に基づき今日のアイヌ音楽文化伝承活動の様相を考察するものである。

アイヌ音楽文化伝承活動については、国の重要無形民俗文化財指定のアイヌ古式舞踊団体や、観光地での活動は、比較的良好に知られている一方、道東は、豊かな伝承が存在した地域でありながら、一部の保存会を有する地域を除いては、その活動についてほとんど情報がなかった。

塘路には、後述する「ベカンベ祭り」という儀礼が存在した。本報告はこの儀礼及び塘路を地盤とするムックリ（口琴）同好会「あそう会」の活動を主な考察対象とする。しかし本稿では、第一回として「ベカンベ祭り」についてのみふれる。

1. 研究の方法

本研究は、1996年から1997年に行なった塘路でのフィールドワークに基づいて進められた。(1)かつて儀礼に参加したことのある女性3名に、塘路、阿寒で録音資料を中心に聞き取り調査。(2)塘

路で、「あそう会」のメンバーを中心に1980年以降の祭りの動向に関して聞き取り調査。

2. ベカンベ祭り

ベカンベ祭りは塘路で古くから行なわれてきたベカンベ（菱の実）収穫に関する儀礼である。この儀礼は、毎年秋頃、菱の実が実る時期に催され、神に菱の実採取の許しを得、その年の豊かな実りに感謝しカムイノミ（神への祈り）や歌舞が行なわれる。毎年近隣のアイヌの人々も集まり、盛大に行なわれていた。しかし、塘路で、カムイノミや歌踊りをできる人がいなくなった1980年代初頭、他地域からカムイノミ、歌踊りのできる人を呼んで、祭りが行なわれるようになった。1980年代後半、祭りからカムイノミが消え1990年を最後に、祭りそのものが行なわれなくなったという。

3. 歌 舞

ベカンベ祭りでは歌と踊りは余興の要素が強い。そのため、固有の音楽は存在せず、クマ送りなどの際の曲目が共有のレパートリーとして存在していたと考えられる。

*えはら・さゆり

上越教育大学大学院平成9年度終了 (e-mail yukigutu@rose.ocn.ne.jp)

4. まとめ

ベカンベ祭りが、現在行なわれていない理由について以下の3点を指摘する。

第一は観光化による影響である。この発端は、ベカンベ祭りの映画化（「森と湖のまつり」1958年、内田吐夢監督）であり、1958年の映画公開以降、祭りに観光客が押しかけ、祭りは、「見せる祭り」として機能しはじめた。これは、祭りにおける歌舞が伝承されないことにつながった。この時、若い女性がアイヌ文化離れを起こしたことが、塘路に保存会が出来なかった大きな要因と思われる。またマスコミへの宣伝を拒否したことは、祭りに対する近隣のアイヌの関心さえも失わせたと考えられる。

第二は人口などの地域的な要因である。塘路を含む道東では、コミュニティー自体の規模が小さいため、保存会も結成されないまま、うやむやに

なってしまった儀礼や歌舞が多いと考えられる。

第三の要因は、保守的な伝統への固執という点である。これは、塘路の人たちが、アイヌの儀礼では欠かすことのできない、カムイノミに精神的根拠を見出していることから起因しているのではないか。儀礼においてアイヌの精神を伝えるには、システムの流れが必要であり、それは、伝統的なカムイノミをすることによってのみ成立するという合意によるものであろう。現在も祭りの復興をめぐる様々な思惑が存在する事を考え合えると、現在塘路ではベカンベ祭りを行わないことによって、その精神性を保っているといえよう。

（注）本報告は筆者が1998年2月に上越教育大学大学院に提出した修士論文「現代におけるアイヌの音楽活動―道東塘路の事例から―」に基づいている。

ミクロネシア連邦ポンペイ島のジェンダー変容について

林 美枝子*

国連開発計画の1995年報告書にあるように、持続可能な人間開発というパラダイムの核心にはジェンダー・ギャップの解消が不可欠である。しかし実際は、完全にジェンダーが平等な文化社会は無いと言われている。しかも、近代化や経済開発が必ずしもジェンダーの平等をもたらすわけではないことも認知されはじめている。社会におけるジェンダーは、その文脈の中に複雑に刷り込まれているため、経済的な開発の度合いで容易に変化するものではないからだ。また、その格差そのものが、実は当該社会の文化的多様性を保証しているような、文化の固有性とジェンダー・ギャップが不可分な関係にある社会の存在も否認できない。

しかし、民俗としてのジェンダーは身近な人間関係の中で相互補完的に生きられながら時間をかけて継承・再生産されているため、単なる統計資

料の数値から各文化のジェンダー指数を序列化するだけでは、ジェンダー格差への当該社会における独特のこだわりというものは見えてこない。近代化とジェンダー変容の関わりを、個別具体的に参与観察する必要性はまさにこの点にあると言える。本研究は、1997年夏と1998年冬の2回の調査をふまえ、ミクロネシア連邦ポンペイ島における近年の民俗としてのジェンダー格差の変容を観察した報告である。

近代的な政治の担い手という視点から、連邦のジェンダー格差の激しさを見てみよう。例えば大統領や議員、省や各州の行政長は全て男性である。一方、伝統的首長制におけるタイトル保持者も、若干の例外を除いて男性のみである。近代的なものであれ、伝統的なものであれ、名誉の生産と体现こそ、重要な男性性のジェンダーだからであろう。

*はやし・みえこ

札幌国際大学 助教授（〒004-0844 札幌市清田区清田4条1丁目4-1 / Tel. 011-881-8844）

調理などの家事の役割分担におけるジェンダー格差はどのようなものであろうか。例えば、公的な場（家族の単位を越えた規模での祭や種々の儀礼）での調理は、男性の専従の役割である。如何に素材の下ごしらえを、巧くかつスピーディにこなすことが出来るか（豚や犬をさばくこと）などは、若年層の男性にとって、一人前の男らしさを表現するまたとない機会である。また、大がかりな石焼きや、複数人で行う嗜好的な飲料作りも、男性たちのみが、共同で手際よくこなしていく。ここでの調理主体は、働き盛りの男性集団であり、女性はそのプロセスを見学するだけである。

私的な伝統的調理の空間においても、家長以外の男性たちは、調理の分担をあたりまえに担っている。ある日の夕食の調理では、椰子の実やイモ類の収穫、魚のバーベキュー、先述した嗜好的な飲料作りなどを、男性たちが役割っていた。女性たちは、その他の単純ではあるが煩雑な種々の調理を担っていた。

こうした調理における独自の伝統的ジェンダー格差に、近代化の一つである男性の賃金労働者化

が、ある変化をもたらしている。ボンペイでは、賃金が得られると建築資材を買い足して、近代的家屋を手作りで完成させていく家族が多い。都市コロニアにはこの種の未完成、工事中の家屋をいたるところで見かけた。そうした家の台所はこれまでの屋外にある屋根付き、屋根無しのオープン・スペースの炊事場とは異なり、水道や電磁調理器まで備えられていることがある。調査で観察しえたこうした屋内の近代的台所で、調理に従事するのは明らかに女性のみであった。

近代的家屋外の私的炊事空間においては、依然として男性の調理役割への参加が維持されている様子が観察され、公的な祭の場での調理もやはり強固に男性専従であった。反面、あらたに獲得されていく近代的家屋内の台所では、調理役割の女性化が進行しているのである。日常行動における新しい条件（男性の賃金労働者化）が、まさに新しい日常行動（限られた空間での家事の女性化）を生みだしている様子が理解できる。ある種の近代化が、新たなジェンダー格差を逆に生みだしている現場であると言えよう。

米国における少数民族の言語／文化継承運動について

大原由美子*

近年、先住民の言語／文化の継承、特に米国における復興の実情には目覚ましいものがある。米国の先住民と歴史的に似通った同化政策のもと同様な社会的差別待遇を余儀なくされてきた他の先住民の言語／文化の復興、継承について米国の前例から学ぶことは少なくないと思われる。本稿は米国の成功例（ハワイ語イマージョン・プログラム、ハワイ大学でのプログラム、先住民の言語プログラムAILDI）の概要を述べ、共通点を見極めることにより他の文化圏の民族への応用の可能性を示唆するものである。

1896年ハワイ州の公立学校におけるハワイ語の

使用が法律によって禁止され、その後ハワイ語は他の多くの先住民の言語と同様「滅び行く言語」とされた。しかし60年代以降、特に86年に公立学校におけるハワイ語の使用拘束が取り除かれてからのハワイ語／文化復興運動は確実な成果をあげている。その一つに83年に始まったハワイ語を保育の媒介とする保育所アハ・プウナナ・レオがあり、これが発展したものが公立学校におけるランゲージ・イマージョン・プログラムである。87年に20名の生徒で発足したこのプログラムの参加者は97年度には1,351名、ハワイ語と英語の両方を教育の媒介とするノン・イマージョン・プログラ

*おおはら・ゆみこ

ハワイ大学大学院東アジア言語文学部 (Tel.808-956-8940 Fax.808-956-9515 e-mail yumikoo@hawaii.edu)

ムでは3,500名が学んでいる。

ハワイ大学ではハワイ言語文学の学士、修士の課程の教育、教師の育成、教科書、資料の開発、ハワイ語の新聞の出版、ハワイ語のよるコンピュータサービス(Ka'awa and Hawkins 1997)を行うとともに、新語委員会を編成しテクノロジーの進化に伴う新語の必要性に答え一般社会に浸透させる役目も担っている。現在大学レベルでハワイ語を習得してる総学生数は3,000を超えている。またハワイ大学は他のポリネシア言語の活動家とともに政府やビジネスにおける先住民言語の使用の促進を目的とする運動の中心的存在である。

自分達の言語を話し書くことができるようになりたいという先住民と自分達の言語学、教授法などの知識を先住民の言語継承に活用したいという言語学者、教育者が集まったのがAILDI(The American Indian Language Development Institute)の始まりであった。初回の1978年には18人だった参加者も毎年増え最近では100人を超えるようになった。ここでの活動の概要は大きく2つに分けられる。まず第一に新しい教育哲学の構築とその現場での実践がある。先住民の教育状況について学力レベルの低迷、退学率の高さが強調され、白人の教育哲学に基づいた批判が長い間成されてきたわけだが、先住民の教育に携わる人々がこういった所謂西洋的な教育哲学に基づく批判だけに囚われないための知識、教育哲学を身に付け各自

の教育現場で実践することを重視している。もう一つは自分達の言語／文化の重要性を再認識し保存もしくは復興の具体的な手段を得る事である(McCarty et.al. 1977)。

本論で扱ったプログラムの活動は、1)言語を失うということは文化をも失うという認識の浸透(i.e. Fishman 1997)、2)先住民の言語／文学の文字化、3)先住民言語の教育、教師の育成の促進、資料等の開発、4)連邦政府の政策、ビジネスへの関与の4つに大別できる。更にこれらのプログラムに共通している点に地域、学校、大学との連携が重要な位置を占めているということが上げられる。

参考文献

- Fishman, J. 1997. "What do you lose when you lose your language?" In G. Cantoni (ed.) *Stabilizing Indigenous Languages*. Northern Arizona University.
- Ka'awa, M. and E. Hawkins. 1997. "Incorporating technology into Hawaiian language curriculum." In J. Reyhner (ed.) *Teaching Indigenous Languages*. Northern Arizona University.
- McCarty, T., A. Yamamoto, L. Watahomigie and O. Zepeda. 1997. "School-community-university collaborations: The American Indian Language Development Institutes." In J. Reyhner (ed.) *Teaching Indigenous Languages*. Northern Arizona University.

言語カテゴリーゼーション論理が示唆するもの—アイヌとウタリの狭間—

スコット・サフト*

本稿は言語カテゴリーゼーション論理の観点からマイノリティグループの呼称について述べるものである。具体的には言語学の分野からF. ソシュール (1916) の言語記号間の関係の論理と言語記号の価値についての概念、社会学の分野からH. サックス (1979) のカテゴリーの所有の論理とを

応用し構築した言語カテゴリーゼーション論理 (サフト、大原1997) に基づきアフリカ系アメリカ人、アメリカ先住民、アイヌを例に分析する。

F. ソシュールの言語記号間の関係は縦の関係と横の关系到に区別される。ここでは、下に示した縦の関係が重要である。

* さふと・すこつと

北海道東海大学 (Tel. 011-571-5111 Fax. 011-571-7879 e-mail saft@di.htokai.ac.jp) ・ハワイ大学マノア校

This steak is	good
	OK
	fair
	decent
	great
	excellent

このようにgoodと他の形容詞との入れ替えが可能である。ソシユールは記号が上記の関係で構成されているのは記号に価値があるからであり、その価値は言語構造における記号の並び方によって決定されるとした。記号goodの価値は他の記号OK, fair, decent, great, excellent等との比較によって決まるということである。この記号間関係と記号の価値をマイノリティグループの呼称に応用するため黒人を例にとると価値の高い順にAfrican-American, black, negro, niggerになる。ここで重要なのは記号の意味と記号の価値は同じではないということである。一般的な意味論では African-American, black, negro, nigger は同じものを示すということから同じ意味を持つされるがこれらの記号に付随する価値は全く違うものである。

H. サックスのカテゴリ-所有の論理を10代の若者を指すカテゴリ-teenagerを例に概要を述べる。teenagerということばは大人によって否定的に使用されることが多いが若者自身が使い出したことばにhotrodderがある。この二つで言えばteenagerは一般の大人に所有されていて若者自身には所有権はない。hotrodderは若者自身が自分達の呼称として作ったものであり若者自身に所有権がある。しかし一般の大人のグループと一部の若者のグループとの社会的な力の差によりteenagerはhotrodderに較べより多く用いられ辞書に掲載されるほど標準的である。上記の黒人の呼称、negro, niggerは現時点で言えば黒人自身が望まない意味が付随し、黒人に所有権はなく彼等がこれらを用いることは一般的に稀である。近年、黒人運動家の間でAfrican-Americanという呼称が使われるようになり黒人間で広まりつつある。African-Americanという呼称は彼等自身に所有されているとい

うことができるが、黒人以外の人々の間ではまだ使用頻度が低い。Indianというカテゴリ-も同様である。アメリカ先住民にその所有権はなくアメリカ先住民はNative American、若しくはIndigenous people of Americaを自分達の呼称として一般社会に浸透させようとしているが、まだ成果を得ているという状況ではない。このように力をもったグループの協力なしに言語記号の価値若しくは意味を変えることは困難である。

言語カテゴリ-ゼーション論理をアイヌの場合に応用するといくつか言えることがあるがここでは地名の問題とウタリ協会を例に上げる。東北、北海道の地名がアイヌ語に由来することは言語学者、歴史学者の間では基礎的な事実である。しかしそれらの地名を日本語の音韻系統に当てはめ漢字に置き換え表記したことにより、それらが日本語以外の言語に由来するという事実が大変分かりにくいものになった。アイヌ語の地名が日本語に置き換えられた時点でアイヌはそれらの所有権を失ったのである。和人による土地だけではない言語カテゴリ-所有権の略奪とも言えるだろう。ウタリ協会についてだが1946年に発足した北海道アイヌ協会は1961年に北海道ウタリ協会と改称し最近その名称の一部ウタリを再びアイヌに戻そうという意見が出てきている。これはアイヌという記号の価値の変遷とともにアイヌ自身によるアイヌという呼称の所有権の奪回への試みとして捉えることができる。このように言語カテゴリ-ゼーション論理によるマイノリティグループの呼称の分析により社会的グループの力関係、所謂偏見や差別を明確にすることができると思われる。

参考文献

- Saussure, F. De. 1916. Course in Linguistics. Illinois: Open Court Publishing Company.
 Sacks, H. 1979. "Hotrodder: A revolutionary category." In G. Psathas (ed.) Everyday Language: Studies in Ethnomethodology. New York: Irvington Press.
 サフト、スコット、大原由美子. 1997. "Linking

Sacks with Saussure: Toward a practical approach
to the linguistic categorization of minority group.

北海道東海大学紀要人文社会科学系。第10号。

1998(平成10)年度北海道民族学会第2回研究大会発表要旨——○

(1998年11月14日 於；北海道立北方民族博物館講堂)

カムチャツカ先住民における現代のサケ漁

北海道立北方民族博物館 渡部 裕*

はじめに

ロシア・カムチャツカ州の先住民文化に関する調査に基づき、現代における先住民のサケ漁を概観するとともに先住民社会におけるサケ漁の今日的意義を考えてみたい。

1998年8月末から9月中旬にかけてカムチャツカ半島中央部に位置するアナブガイ村、北西部のティギル村(オホーツク海から約40km内陸)そしてティギル村の北東約160kmの海岸近くに位置するバラナ村を訪問し、サケ漁やトナカイ飼育、狩猟に関する観察調査、聞き取り調査を行った。各村の人口構成に占める主要な先住民は、伝統的な民族居住域を反映していて、アナブガイ村ではエヴェン、ティギル村ではイテリメン、バラナ村ではコリヤークが比較的多く居住している。

サケ漁

比較的水深が浅く、川幅もあまり広くない内陸河川ではkatepと呼ばれる、魚止め柵と箱罟あるいは籠罟を組合せたサケ捕獲施設が使われている。水深のある河川や河口近くでは刺網が使われており、また、バラナ村ではkatepや漏斗状の籠ワナも実際に利用されていた。さらに、鉤鉈もまったく過去の漁具ではなく、アナブガイ村ではエヴェンの老人がフィッシュキャンプに鉤鉈(marik)を持参していた。このように今日の先住民のサケ漁具には伝統的なものから近代的なナイロン漁網まで多様なものがみられる。

現在、先住民には一定の漁獲が認められてい

る。このライセンスの捕獲枠は地域によって異なるようであるが、アナブガイ村では1人あたり30kgとされている。また各地域の漁期は一定ではない。たとえばアナブガイ村では9月末まで漁を行うというが、ティギル村ではアメマスやギンザケの遡上がさかんになり始めたにもかかわらず9月6日に終漁してしまった。

サケ漁に従事する者は許可をうけている全員ではなく、拡大家族の一部の者が行っている。ティギル村では2名の男性が中心になり、ときどき拡大家族の一部の者が交代で漁を手伝っていた。アナブガイ村やバラナ村では退職した老人たちがサケ漁を行っていた。

サケの利用と意義

伝統的なサケ類の加工は天日干しによる干しサケであるが、現代では燻煙乾燥が中心になっている。アナブガイやティギルではところどころの家庭に燻煙小屋が設置されていて、燻煙するサケはあまり濃くない塩水に12時間ほど漬けてから燻煙するという。また、アナブガイ村やティギル村のフィッシュキャンプではテント内で燻煙されていた。かつてサケの魚卵は乾燥されイヌの餌(エヴェン)や人間の食料(イテリメン)となっていたが、近年、魚卵は塩漬けにされ、毎日の食卓にのぼっていて、イクラは現代のカムチャツカ先住民の人たちにとって欠かせない食品となっている。一方、伝統的な加工も残されており、アナブガイ村では干したサケの身を粉末にしたpolshaがつく

*わたなべ・ゆたか

北海道立北方民族博物館 学芸課長(〒093-0042 網走市字潮見309/Tel.0152-45-3888)

られていた。また、細く切ったサケの身の塩蔵品も各地でみられた。

トナカイ飼育を中心としたソホーズが機能しなくなった今日、現金収入の少ない北部の村の住民は食料を自前で確保しなければならない。家庭でつくる野菜やジャガイモとともに干しサケや塩漬のイクラは大きな位置を占めている。また、乾燥したサケはイヌの餌としても利用されてきたが、アナブガイ村やティギル村では、狼犬やクマに対する番犬としてイヌは現代でも重要性をも

ち、航空運賃の高騰や慢性的燃料不足から、イヌ橇などの伝統的移動手段が復活しつつあり、この点でもサケ漁は重要性を増してきている。

しかし、現在、先住民の居住する村は、かつての少人数の集落から、集団化と再編によって作りだされた集落であり、すべての先住民が周辺の資源を利用することはできない状況にある。また燃料不足により移動手段を確保できない現況では、遠隔地への移動も困難であり、自然の資源へのアプローチには課題が多い。

メトラカトラ村(アラスカ・チムシャン)における調査; 特にNative Village Tourの現状について

齋藤 玲子*

本発表は1998年夏の4週間、北海道東海大学岡田淳子教授を代表とする「北西海岸インディアンの開発人類学的研究」(文部省科学研究費・国際学術研究・課題番号10041029)の研究協力者として参加した、アメリカ合衆国アラスカ州アネット島メトラカトラ村での調査の中間報告である。

この研究の趣旨は、欧米文化との接触以後、世界経済の中に組み込まれ、大きな変貌をとげた北西海岸インディアン社会の実態を明らかにすることである。独自の開発の歴史をもち、日本の企業とも関連が深い、チムシャンの住む同村で次年度まで2年間の現地調査を実施し、歴史、現況および今後の展望について資料を収集し分析しようというものである。報告者は、観光と工芸品製作・販売の実態調査を分担したので、同村への「Native Village Tour(以下ツアー)」の様子を撮影したビデオを上映しながら、概要を紹介した。

メトラカトラへの観光客は、ケチカンに入港した大型フェリーからのオプション・ツアーが大半を占める。最初にツアーが行われたのは1990年で大手旅行社グレイ・ラインのフェリー客を受入れたことから始まり、住民が主体となって本格的に取り組むようになったのは5年ほど前のことで

ある。現在もグレイ・ラインとウェスト・クルーズ2社からの客が多く、その人数はここ数年ほぼ500~600人程度で夏季に集中しており、報告者が滞在していた7月下旬~8月上旬にかけては週に2、3回のツアーが見られた。1団体は約10~40人までさまざまである。多くがアメリカ本土からの観光客のようだが、博物館のサイン帳を見るとヨーロッパの国名もいくつか目に留まった。

ツアーの内容は、カナダからの移住の指揮者ダンカン師の家を利用した博物館と水産加工場を見学し、バスでロングハウスまで移動、そこで踊りを見た後、サケをメインにした食事を楽しみ、スモーク・サーモンの缶詰1個をもらって帰るといふ。約90ドル、2時間余りの短い滞在である。工場のギフトショップとロングハウス内ではサケ加工品や工芸品などが売られており、手にとる客は多いものの、もとより人数が少ないのであまり収入には結びついていないと思われる。

観光受入れ組織の主要メンバーは7人で、博物館キュレーターである女性がマネージャー、ガイド兼ダンス・リーダーの女性はヘッド・スタート(幼稚園)の職員、ツアー客を乗せるバスはスクールバスを利用して専任のドライバーが運転して

*さいとう・れいこ

北海道立北方民族博物館 学芸員(〒093-0042 網走市字潮見309/Tel.0152-45-3888)

いる。そして料理の担当者とこれらのアシスタントに、ふだんは他の職に就いている人や主婦、学生たちのダンサーが5～15人くらい加わる。これらの活動を担っているメンバーの中には、アラスカの都市部や合衆国本土で高い教育や技術を身につけた後コミュニティに戻り、村の発展のため役場や学校などで働いている人も少なくない。

99年には直接アネット島へ乗り入れるフェリーが増え、ツアー客も一気に倍増の見込みという。また、ロングハウスの横に「Artist Village」の建設を計画中的のことで、中の工房では地元工芸家

の製作現場を見たり、買い物もできるようになるという。水産加工品や林業産品の輸出が厳しい状況のなかで、経済的にも観光は期待されるところである。また、住民は「伝統的」なチムシャン文化を学ぶことにも積極的であり、将来はますます観光や工芸品製作に力を注いでいくことになるだろうと予想される。

今後の調査の課題としては、メトラカトラでの観光と工芸に関わる数値データを把握することや、アラスカの他地域のネイティブ・ツアーとの比較などが挙げられるだろう。

斜里町立知床博物館所蔵のアイヌ資料について

宇仁 義和*

1. 『斜里町史』編纂過程での収集資料

『斜里町史』は、高倉新一郎を監修者とし、執筆は、河野広道、更科源蔵、知里真志保が担当して、1955年（昭和30）に刊行された。先行してアイヌ資料が収集され、そのうち刀身、鐔、矢筒などが当館に収蔵されている。収集者は、町史刊行を企画した木下源太郎社会教育課長（当時）である。収集地は町内と考えられるが、附属情報がなく、使用者や場所、年代はわからない。

また関連して、河野と更科によって、坂井惣太郎などから聞き取り調査が行われた。河野の調査記録の一部は北海道出版企画センター1981『河野広道ノート 考古篇1』に収録され、更科のノートは弟子屈町図書館に保管されている。当館には更科の草稿と原稿などがある。

2. しれとこ資料館開設時の収集資料

しれとこ資料館は、1970年（昭和45）に開館した。先行して、北海道開拓記念館の資料収集協力員（1969～71年まで）を務めた栗沢喜重郎を中心に、斜里町郷土史研究会の手でアイヌ資料の収集が行われた。加えて、斜里のアイヌによって展示用資料が作成された。これらの資料は、当館のアイヌ資料の中核をなす資料である。

アイヌ資料の中核をなす資料である。

町内で収集された資料は、イナウ製作用の小刀、タイの根付け付き小刀鞘、アザラシ猟用銚先、銚網を入れた編袋、織り具、漆器、日露戦争時の軍隊手帳、文書類などである。資料の多くは、坂井惣太郎関連のものである。

町外の資料としては志富イサネ夫妻の寄贈品がほとんどを占める。内容は、阿寒で使用されたわらじ、アザラシ皮靴、静内周辺で収集された臼、杵、椀、杯、衣服、二風谷のゆりかご、旭川周辺で収集された小熊着、ゴザ、葬儀具がある。町外資料については、附属情報が少ない。

作成資料は、トド皮紐付きサケ皮靴、白樺樹皮製容器、ひしゃく、食品や薬品などで、作者は広田好太郎と谷川ミツで、資料に関する直接の聞き取りや関連する記録はないが、北海道開拓記念館1974『民族調査報告書 資料編Ⅲ』では2人が聞き取り調査の対象となっている。

3. 緊急発掘調査出土品

近世アイヌ文化期の遺跡からの出土品である。遺跡によっては貝塚の絶対年代が判明しており、松浦武四郎など当時の記録との突き合わせが進む

*うに・よしかず

斜里町立知床博物館 学芸員（〒099-4113 斜里郡斜里町本町49番地／Tel.01522-3-1256）

ことで、近世アイヌ文化を検証する重要な資料となるものと考えられる。

主な出土品は、鯨骨、アザラシやオットセイなどの海獣骨、鯨骨や海獣骨製の銚先、海獣骨製のボタン、焼酎徳利、寛永通宝、鉄鍋などである。

4. その他

町内のコタン跡から採取された資料として、斜里川河口のパナコタン跡から銅製両口容器が、左岸のクシュンコタン遺跡からシカ下顎骨に刺さった状態の銚先、中柄、ガラス製装身具などがある。

他には、役場から移管されたイナウがあり、19

72年（昭和47）頃、ウトロで行われた熊送りで使用されたものと考えられている。

5. 資料台帳

当館収蔵のアイヌ資料の台帳は、斜里町立知床博物館1983『所蔵資料目録3 民族資料(一)』として刊行され、(財)北海道ウタリ協会1988『アイヌ史資料編2 民具等資料所蔵目録』に再録されている。作業にあたったのは、当時、北海道開拓記念館主任研究員の職にあった藤村久和である。

なお、発掘調査出土品を除き、すべての資料について登録カードを作成している。

なお、第2回研究大会では、先行して開催されていた第13回北方民族文化シンポジウム「北方の開発と環境」の出席者であるロシアカムチャツカ生態学・資源管理研究所のヴィクトリア・V・ペトラショヴァさんによる講演「カムチャツカ先住民族（コリヤーク、イテリメン、エヴェン）の過去と現在」があった。（ロシア語通訳；永山ゆかり氏）

今年度から事務局が変わり、不慣れのためいろいろとご迷惑をおかけいたしており申し訳ありません。遅くなりましたが、北海道民族学会通信99-1・2をおとどけします。

今年の活動をふりかえりますと、まず、2回の研究大会を、札幌と網走とでおこないましたが、通信でもおわかりのように、発表者もおおく、通信を増ページいたしました。また、研究大会を札幌圏以外で開催することは、かねてからの懸案でありましたが、今年、北海道立北方民族博物館の全面的なご協力のもとに、同館で開催することができました。あらためてお礼を申し上げたいと思います。今後も、機会があれば、札幌圏以外での開催を考えていきたいと思っています。

このほか、今年度は、以下のふたつの大会を他機関との協力のもとに開催いたしました。

1：CHAGS 8（国際狩猟採集社会研究会議）北海道講演会

北海道新聞社、CHAGS 8事務局との共催

日時；10月31日(土) 場所；北海道大学 学術交流会館

1—狩猟採集社会およびポスト狩猟採集社会：CHAGS 8の成果——小山修三（国立民族学博物館）

2—アフリカの狩猟採集民：その歴史、生存とアイデンティティの政治学——リチャード・リー（トロント大学）

3—近代国民国家の中の狩猟採集民——ニコラス・ピーターソン（オーストラリア国立大学）

2：「ハンティの熊祭り」

北海道大学スラブ研究センター主催、当学会後援

日時；3月15日(月) 場所；北海道大学スラブ研究センター大会議室

1—記録ビデオ上映—解説；谷本一之（道立アイヌ民族文化研究センター所長）

2—講演「北ハンティの熊祭りについて」—タチヤナ・モルダノヴァ（オビ・ウゴル民族文化研究所副所長）・チモフェイ・モルダノフ（オビ・ウゴル民族文化研究所地域民族基金室長）